

# 大腸様 昨日は有期、フワリ〜

# 論壇記中にお届け致します。

村田

## 八、「もつたないない」運動の勧め

### 福田赳夫元総理

―二言尊徳の教え― 1995（平成7）年1月

今年（戦後五十年に当たり、またあと六年たつと二十一世紀を迎える。まさに世紀末であり、反省の好機でもある。いま人類の歩みの来し方を振り返ると、地球全体が一大転機に差しかかっており、これから歩むべき道を誤ると、二十一世紀はそう遠くない時期に、人類が生き残れるかどうかの危機を迎えるかもしれないという思いがする。

地球上には五十億の人間が生存している。その一人ひとりはいずれも姿、形、頭の働きが全く同じということはない。それぞれに優れたところもあり、劣るところもある。その長短を互いに分かち合い、補い合う、そのような様々の過程を経て人間は成長してゆくものだ。

国や社会などは人間が長い時間をかけて育て上げたこのための仕組みである。この世で生をうけた以上、その資質を伸ばしに伸ばし、余力を蓄え、世のため人のため、社会公共のために奉仕しなければならないことは当然である。その奉仕の多寡が、その人生の価値をはかる基準の大きな一つである。これが私の人生哲学である。

いま、理念は生きる

今世紀、百年足らずの間に、全世界の国民総生産（GNP）は実に十五倍になった。これは石油という新エネルギーの開発利用と技術革新が重なり合ったことが大きな原因であり、この物質的繁栄の中で、私たち人間は「モノ」「カネ」というものに関心を奪われてしまった。「作りましょう」「使いましょう」「棄（す）てましょう」という風潮が今、世を覆っている。人間社会はこのような姿であり続けてよいのだろうか。私たちはここでそのことを深く考え、将来の設計に当たる必要があるのではあるまいか。

人間はこの地球に住みついて何万年もの長い間、自分たちが生存在していくための資源エネルギーは無限であると考えてきた。ところが、実はそれは無限ではなく有限であるとの認識に立たざるを得なくなったのだ。

世界では毎年一億人近く人口が増え続けている。イエス・キリスト時代の地球上の総人口は約二億人だったといわれる。それが今世紀はじめには十六億人となり、今世紀末には六十四億人になるだろうと推定されている。さらに二〇二〇年には八十億人、二〇五〇年には百億人に達するといわれている。

試算によると、食糧だけをとっても、この地球上でまかないうる人口の限界は八十億人だといふ。さらに、空気・水などの環境やエネルギーにそれぞれ問題がある。人間が限りある地球上の資源をいままでのように使い荒らし、棄て去っていたらいったいどうなるのだろうか。



立花大龜和尚と 1988（昭和63）年ころ

この私の人生観から「政治は最高の道徳」という思想となり、新党運動、時には政治の出直しの改革の叫びとなった。また経済運営の面では終始、「安定成長論」を堅持し推進する原動力ともなった。さらに国際政治面では「世界の中心の日本」や「全方位平和外交」となり、個人の心構えとしては「世界は二人のために」ではなく「世界のために二人はある」となるわけだ。

ともあれ、人類は何万年かそれ以上の長きにわたり、戦争と平和を繰り返しながらここまでやってきた。そして、二十一世紀という物質文明の花の咲き乱れる時代を迎えている。

冷戦体制は終焉（しゅうえん）し、対話と協調という新たな恒久平和を築く歴史的チャンスが与えられた。しかし、現実の世界は各地で紛争が起り、不安はむしろ増大しているようにさえ見える。とくに過去の軍拡競争で蓄えられた核兵器はほとんど手つかずで残されている。しかし、その暴発は人間の英知で抑えることも不可能ではない。

それより厄介なのが爆発的に増え続ける人口問題であり、それと地球上の資源・エネルギーとの調整の問題である。この調整を誤ると人類に未来はない。

私はかつて戦後の思想を「昭和元祿」と表現した。「モノ」「カネ」に偏った時代を正すのが私の願いだ。いま「もつたないない」という声すら聞かなくなった。資源有限時代という認識に立ちかえり、この「もつたないない」運動から地球全体を見直すきっかけにすべきだと思ふ。人類生き残りのために。（元首相）

（1月7日付朝日新聞への寄稿全文）

【解説】群馬県高崎市在の名主の家に生まれた福田氏は、幼いころから両親の影響で二言尊徳の教えを忠実に守って育った。福田氏は衆議院議長選挙十四回を果たしたが、昭和二十年代には、選挙のたびに熱を込めて「勤儉貯蓄」を説いた。

これがやがて福田氏の「資源有限」「省エネルギー」の指導理念に結びついていった、とも考えられる。